1 自己評価及び外部評価結果

(ユニット名 グループホーム結い)

事業所番号	0690800362		
法人名	庄内みどり農業協同組合		
事業所名	グループホーム結い		
所在地	山形県酒田市千日町4-4		
自己評価作成日	令和 4年 11月 7日	開設年月日	平成 30年 4月 1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで検索し、閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 エール・フォーユー		
所在地	山形県山形市小白川町二丁目3番31号		
訪問調査日	令和 4年 12月 1日	評価結果決定日	令和 4年 12月 22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

閑静な住宅街に位置し、農協の支店を増改築したため、屋根続きの和室会議室として30畳ほどの交流スペースがあり「てんとうムシ居室」(転倒予防体操)の開催など、組合員・地域住民の出入りがあります。コロナ禍前は利用者様も参加し、良い刺激となっていました。また、歩いて2~3分の所に「青麻神社」「自治会館」があり、夏祭りに参加し、地域住民と顔が見える環境を心がけていました。ただ、今年もコロナ禍で、外出・ボランティアの来所、地域・家族交流を控え、月一の行事食を、入居者様・職員と一緒にメニューを考え、調理し、食べる楽しみに変化を持たせました。日々の活動としては、レクやドライブ(お花見・紅葉・市内観光・コミセン文化展見学等)・機能訓練を行い、筋力低下予防・認知症状の緩和に努めております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は市の北西部に位置し、高台の閑静な住宅街の中で地域と馴染んでおり、理念に沿って家庭的な雰囲気の家が家や一人ひとりの生活リズムの尊重と尊厳等を掲げ、利用者のできることを見つけて一緒に喜びながら生活ができるように支援をしている事業所です。またコロナ禍で外出の機会が少なく、レクリエーションなどを多く取り入れ利用者のストレス軽減に努めたことにより、笑顔が多く見られ生きがいに繋がっています。利用者は温かい支援に包まれて思い思いの生活になじみ、楽しみを持ちながら穏やかに暮らしています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~54で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
55	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	62	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
56	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,37)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	63	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
57	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	64	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
58	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:35,36)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
59	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:48)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
60	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:29,30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

山形県地域密着型サービス「1 自己評価及び外部評価(結果)」

※複数ユニットがある場合、外部評価結果は1ユニット目の評価結果票にのみ記載します。

自 己 外 部	項 目	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「運営理念とコンセプト」を事務所内へ掲示し、職員がいつでも確認・認識が出来るようにしている。開設当初から、管理者も職員と同じシフトに入り、業務内容の確認・把握し、職員との方向性の統一を図り、理念の実践に心がけている。	理念を事務所内に掲示して、会議の時やさまざまな機会を通して理念の確認を行いケアの統一を図っている。コロナ禍でも地域の人たちと共に協力しながら笑顔のある暮らしを提供できるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、自治会の回覧板の中で、可能と思われる地域の自治会に作品を提出・見学に外出している。今年も継続的にコロナ禍で、公共の場への外出を控え、ドライブ・公園の散歩を行っている。	自治会に加入し回覧板を通じて地域行事を把握し、コミセン祭りに利用者の作品などを出品していたが、コロナ禍のため自粛せざるを得ない状況にあり、コロナ感染症の動向を見ながら地域との交流を続けている。ボランティアの受け入れや家族交流も考慮しながら進めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の行事に参加したり、施設内での催し物・地域の方を招いて、入居者と触れ合いながら、認知症を理解し、温かい眼差しを頂けると思われるが、今年もコロナ禍のため、ボランティアの来所・地域交流を控えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催し、入居者家族代表・自治会長・民生委員・行政・地域包括職員の方から、ご出席頂き事業所の運営状況や入居者の様子を報告するとともに多様な情報交換の場として頂いたご意見を、運営のサービス向上につなげている。	運営推進会議を定期的に委員5名の参加で実施している。事業所の運営状況や利用者の入居状況・行事等の報告をした後に意見や要望を聴いて事業所運営に反映させている。会議結果は職員へ周知を図り、家族等にも電話等で報告を行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍前は、市から月1回、担当の派遣相談員が来所し、入居者と触れ合い、職員との橋渡しをしてもらっていた。現在は自粛となっており、市からの随時メール配信があり、その都度確認、大切な情報を頂いて、不明な点は説明を受け協力体制にある。	介護相談員の受け入れはコロナ禍でできないが、市担当者とはメール等で情報を共有している。事業所の実情やケアサービスの取組みを伝え、利用者についての相談等も丁寧に対応してもらい協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、環境や利用者の状態を考慮しながら、玄関に鍵をかけない工夫や、身体拘束をしないで過ごせるような工夫に取り組んでいる	月に1回の職員会議で話し合いをし、各自でスタッフBookの確認を促し、身体拘束について認識を深める。また、相互研修での研修も行っている。帰宅願望が聞かれている時も、玄関を施錠することなく、傾聴・見守り・声掛けで職員が寄り添っている。そのことで、出来るだけ、ご利用者の希望に寄り添っている。身体拘束のない生活、安心・安全なケアを取り組みとしている。	身体拘束等の適正化のための指針を策定し、身体拘束の適正化検討委員会を年4回開催している。身体拘束廃止に向けた研修を重ね、言葉がけでも職員同士が注意し合いながら優しい口調で接しており、利用者は安心して明るい日常生活を送っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の具体的な行為はもとより、言葉遣い一つからも虐待につながることを念頭に置き、防止に努め、一人の人として尊重することを心がけている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している入居者はいないが、今後において、施設内研修や勉強会・外部研修参加の機会を持ち、必要な制度の活用、認識を深めていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の前に、施設見学して頂いたり、契約書の記入の際は書面を用いて、ご家族に分かりやすい説明を行い、同意とご理解、納得して頂いてから署名・捺印をお願いしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご利用者が自身の思いを気軽に話せる温かい雰囲気づくりに努め、気分の落ち込み、不安の訴え聞かれるときは傾聴を心がけている。ご家族が来所・電話の時は入居者の生活・健康状況を報告するとともに、ご家族の要望も伺っている。	利用者の様子を観ながら、その人に合わせた声がけで希望等を聴き取っている。また家族等にはお便りや電話で生活状況を報告し意見や要望を聞いて、職員で共有し運営に反映できるようにしている。	
11		○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日、口頭での申し送りに加え、業務ノート・ケアノートの2種類を準備し、確認している。気になる入居者については、緊急性があれば、その都度、あるいは、月に1回の職員会議の場で意見交換し、支援方法と業務改善に努めている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月に1回の職員会議を職員間の意見交換の場と捉え、運営者も参加し、職員の思いを聞いてもらっている。年間休暇125日の他、有給休暇・希望休などでシフトの融通性も考慮し、就業環境に努めている。		
13	(7)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	行政・他事業所からの情報により、研修が開催されている時には、回覧と口頭で、情報提供し参加を促している。また、講習会参加者による伝達講習などで、職員の知識向上に努めている。	他事業所と合同でオンライン研修を受講し、認知症・感染症・パワハラ・虐待等の外部研修にも積極的に参加している。新人職員にはマンツーマン体制で介護技術や利用者との関わりについて指導している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(8)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	同業者の情報により行われる研修会に参加し、その場で情報交換をした内容を施設に持ち帰り、職員会議で伝達講習、または文書で回覧し、サービスの質の向上に繋げている。	市主催の医療サポート研修会において、コロナ感染症予防対策や認知症などの研修を受け、職員間でも共有を図っている。JA庄内みどり経営の同グループホームと交流し、互いの良い所を取り入れ支援に繋げている。	
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に事前面談でアセスメントし、前ケアマネ・施設(病院)相談員に情報提供を依頼し、本人の困っていること・要望に対して、ご家族と一緒にどのようなサービスを提供していくのか考え、安心して入居して頂けるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス利用を前提として話を勧めるのではなく、ご家族の不安や悩みに耳を傾け、信頼関係が気付けるように努めている。また、必要に応じて、定期受診など、ご家族が対応できない場合、他サービス(有償サービス)などを紹介している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用前に本人・ご家族と面談し、要望を伺い、前ケアマネや施設(病院)相談員と情報交換を行いながら、必要なサービスを見極められるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のできることを見極めながら、声掛けし、手伝いをして頂いている。調理・盛り付け・配膳・後片付け・洗濯物干し・畳み・居室掃除などを通して、家庭的な雰囲気を大切にしている。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時に利用者の現状を伝えている。また、コロナ禍で面会がほとんどできていない状況のため、電話・文書で伝えたりもしている。毎月のお便りでは暮らしぶりを写真で掲載し、居室担当が手書きのメッセージを載せて親しみを図っている。		
20		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人や身内の方の面会も気楽に立ち寄れる雰囲気作りを心がけている。ご家族の協力の下、外出や外泊など、気分転換になるように支援していきたいが、コロナ禍で殆どが、自粛になっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が声掛けや間に入り、利用者間で孤立しないようにレクリエーションや行事を通して、お互いが関わり合えるように配慮している。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院・他施設への退居など、退去者に親身な相談・援助を行い、退居後も信頼関係が築けるように努めている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話・行動・仕草や表情から感じ取れるように、目配り・気配りに努めている。しかし、困難な場合は、ご家族に協力いただいている。	静かに過ごしたい方・本の好きな方・新聞の好きな方など、それぞれの意向を尊重し日常生活の中から利用者の思いを聞き出している。表出のできない方には様々な写真等を見せて好みなどを選んでもらい、思いや意向の把握に努めている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前面談や入居時、今までの生活歴・生活環境・趣味などを伺える範囲で情報収集するように努めている。それを職員間で共有し、把握に努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	心身の状態の変化に注意し、早期発見できるように毎日決まった時間に健康チェックを行い、日頃から、一人ひとりの状態をケース記録や申し送り・ケアノートを活用し把握に努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	居室担当が、月1回介護計画に対するモニタリングを行ったものをもとに、職員会議や、早急に対応することはその都度、入居者の状況を話し合っている。それをもとに、介護計画の見直しを行い、ケアの統一に努めている。	利用者・家族等の意向や要望を把握し、求めに応じて支援できるように利用者本位の介護計画を作成している。毎月のケア会議で話し合い、状態変化に応じて都度見直しを行いチームで支援している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の経過記録に、様子やケアの内容・状態変化などを記入している。申し送りノートの活用、また、必要に応じて、いつでも閲覧できるように情報を共有している。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の自治会に加入し、夏祭りや、市内の行事に参加・見学などを行っている。自治会長や民生委員の方からも情報提供して頂いている。コロナが終息したら、以前行っていた、月に1～2回ボランティアの方に来所して頂き、生活に変化と楽しみを持った生活が出来るように支援していきたい。		
29	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、かかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月1回の定期受診時、必要な入居者には日頃の様子を文書にし、ご家族・主治医に情報提供している。体調が優れず、早急に受診が必要と思われる時は、ご家族に連絡し、施設でかかりつけ医か協力医に受診し、家族と連携を図っている。	定期的な往診とかかりつけ医の受診や容態によって必要な診療科目を受けられるように支援している。家族等に対応できない場合には職員や訪問介護員が付き添いを行い、医師への情報提供と利用者・家族等とも受診結果を共有し、健康管理や医療面で不安のないようにしている。	
30		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	必要に応じて、デイサービス所属の常勤看護師に相談・健康指導を受けて、入居者の健康管理に努めている。いつでも連絡が取れる体制にはなっているが、現在、コロナ禍で、現場での応援は難しい状況にある。		
31		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、入院治療が必要な可能性が生じた場合は、協力医療機関を含めた病院関係者との関係づくりを行っている。	色々な事情で入院となった入居者には施設での生活状況を報告し、速やかに病院の相談員と連携をとり、主治医や病棟看護師と情報交換を行っている。そうすることで、早期退院や今後の治療方針を確認でき、入居後の生活が安定したものになるように努めている。		
32	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、医療関係者等と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に重度化や終末期について施設の方針を説明している。本人の状態報告を、出来るだけ早めにし、主治医と連携をとりながら、より良い生活環境になるよう、職員、場合によっては看護師を交えて相談に応じられるように努めている。	医療ニーズが必要となった場合には適切に対応できるように体制を整備しているが、看取りまでは至っていない。心身と機能の維持回復が望めなくなったときには特別養護老人ホーム等と連携を図り、より適した環境のもとで過ごすことが出来るように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
33		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急マニュアルを具体的に作成している。それに添って職員間で話し合い、シミュレーションも行っている。時間帯によっては職員が一人体制もあり、定期的に研修会・訓練を行い、不安を軽減するために実践力を身につけていく必要があると考えている。			
34	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、施設の防災計画に基づいて、防災訓練を行っている。訓練では、庄内防災・消防署の指導を頂いている。水消火器訓練・通報機器の取り扱い、11月には地震想定訓練を予定している。コロナ禍で、地域住民との連携ができていないため、今後の課題となっている。	訓練計画に基づいて避難訓練を実施し、災害発生時の初期対応と人命を最優先に避難経路や利用者の安全確保を主眼として訓練を行っている。設備業者も参加して防災機器の取り扱いについて指導を受け、職員は訓練を重ねて災害対応の重要性を認識している。	事業所の災害発生時における対応について、地域から理解と協力が得られるように自治会や運営推進会議等で働きかけ、災害時の協力体制を築かれることが望まれる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
35	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩として、敬意を払いなが声掛けし、人格を尊重している。自尊心や羞恥心にも配慮し、入居者の立場にたって言葉遣いにも留意している。また、プライバシー保護や個人情報の管理にも周知徹底している。	その人の尊厳を大切にして、誇りを傷つけたりプライバシーを損ねることのないように常に確認と改善に向けて取り組んでいる。発する言葉を否定したりあからさまな介助にならないように言葉遣いにも注意して対応している。		
36		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	無理強いせず、入居者の意思や希望を尊重するように努めている。また、非言語コミュニケーションを意識し、難聴の方には筆談を用いて、表情からも思いをくみ取れるように心がけている。			
37		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおよそ、起床時間・食事時の時間・入浴日に決まりを設けているが、一人ひとりのペースを大切に、起床時間・体調が優れないときは、食事の時間・場所を変更したり、入浴日も変更して対応している。			
38		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身支度や普段着選びなど、可能な入居者にはご自分で行ってもらっている。基礎化粧品や月に1回訪問理容を依頼し、好みの髪型にしている。本人の希望を優先し身だしなみに気配りしている。			
39	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は毎食、手作りしている。行事食の時は入居者みんなでテーブルを囲み調理を行い、食事を楽しんでいる。献立は出来るだけ季節感を取り入れ、記念日には希望の食事を注文し特別感を出している。	旬の食材を活かして三食作って提供し、食事が楽しくなるようにメニューを紹介したり雰囲気づくりを行っている。調理や配膳・後片付けなどの出来ることを手伝ってもらい、刻み食などその人に合った食事や嗜好を考慮して作り喜ばれている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
40		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の形状・量など個人の希望に合わせて提供している。水分についても好みのものを提供し、入浴後は必ず水分補給を行っている。持病により塩分制限ある入居者にも配慮し、一日分の食事・水分摂取量を記録している。			
41		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	1人1人に声掛けし、毎食後に歯磨き・義歯洗浄など、その人に合った口腔ケアをご自分で行ってもらう。不十分な方には職員、声掛け・見守りし仕上げを行っている。今後は、口腔ケアの研修会に参加したり、協力歯科医からのアドバイスの機会を検討したい。			
42	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	自立以外の方には定期的に声掛けし、トイレ誘導を行い、トイレでの排泄に努めている。夜間は転倒のリスクを考慮し、また本人の希望に添い、ポータブルトイレを使用している。下衣動作に関しては見守りを行い、できないところ・不十分なところを一部介助している。	自力排泄の出来ない方が多く、プライドの高い人にはトイレ誘導するときは言葉を工夫しながら対応している。ズボンや下着の着脱が難しかったり後始末ができない場合でもさりげなく介助し、羞恥心や不安感を軽減するための配慮を怠らないように注意して支援している。		
43		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘がちな方には水分を多めに勧めたり、牛乳を提供・毎日の体操で特に下肢運動を強化し、日々の排便確認し無排便の日数を把握している。必要に応じ、かかりつけ医と相談し、薬の処方を検討してもらっている。			
44	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、事業所の都合だけで曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	最低週2回の入浴日を設け、個々に対応している。その時々々の状況を最優先し、本人の希望に添うように努め、入浴を楽しんでもらっている。	ほとんどの人が入浴時の介助を必要とし、転んだりヒートショックなど入浴時の事故がないように注意している。入浴方法にも多様性があって無理強いせずに次の日にしたりその人の気持ちを大切に柔軟に対応している。		
45		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間は特に決めていないが、他入居者の入眠に配慮し、20時頃にホールの電気・テレビの音量の調整している。一人一人のペースで就寝して頂いている。			
46		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服管理は職員が行っており、服薬内容についても理解するようにしている。不明な点・状態変化が見られた時は主治医・薬剤師に相談している。誤訳・飲み忘れがないように、服薬チェック表を作成し、ダブルチェック以上の確認をしている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除・洗濯物干し・畳み・調理の手伝い・盛り付け・後片付けなど、日常生活で役割をもって行っている。外出ドライブや天気の良い日は施設周辺を散歩し、気分転換を図っている。			
48	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年もコロナ禍の影響で、日常の外出・地域住民との交流は控えざるおえなかった。人込みを避け、車内だけのドライブを楽しんでもらっている。定期受診後、ご家族とご自宅へ帰るなど楽しまれている。	外出を希望する場合には感染防止対策を徹底して個別に対応し、なるべく外気に触れてストレスの発散や五感刺激を得られるように支援している。観光地に行っても車から降りずにほかの人との接触を控えて外気浴を楽しんだり、法人内の施設で大根や芋掘りなどをして喜んでいる。		
49		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の意向を尊重し、ご家族と相談の上、上限を設けて「預り金」として、本人が自由に使えるお金を施設管理でさせて頂いている。本人にとって、必要(日常消耗品・理容料金等)と思われるものに使わせて頂いている。			
50		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人より希望がある時は、施設から入電し、あるいはご家族からご連絡を頂くなど、いつでも話ができる体制にしている。コロナ禍でなかなか会えない状況が続いているため、希望する利用者には手紙や年賀状のやり取りもできるように支援していきたいと考えている。			
51	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内はバリアフリーのベージュ仕様で明るい空間になっている。フロア・居室・浴室・トイレも毎日掃除を行い、清潔を保っている。廊下が、回路式になっており、歩行練習などには飽きない空間となっている。2週間毎に季節の花が届き、施設内が華やか様子で、入居者も楽しみにしている。また、手作りの装飾品を飾って共有スペースを工夫している。	利用者は居室とリビングを行き来して語らいながらゆっくりと過ごし、定期的に届く綺麗な花に心を和ませている。全体的に華やかな装飾を控えて落ち着いた雰囲気に整え、居心地よく安心して暮らせるように工夫されている。		
52		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに大型テレビを設置し、音が聞き取りにくい入居者には音量を調整したり、字幕を付けたりして鑑賞している。個々に新聞・本・雑誌を見たり、ソファや畳スペースで寛いでいる。気の合う入居者同士で会話を楽しんだり、時には職員も間に入り会話を盛り上げている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
53	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	クローゼット・チェストが既に設置しているため、寝具類は愛着のある物や、好みの物をご家族に揃えてもらっている。ご希望で、居室にテレビなど家電の持ち込みも可能としている。チェストの上や壁には写真など、愛着ある物を飾って入居者自身が心地よく生活できるスペースになる様心がけている。	今まで使ってきた枕やラジオなどを持ち込み、写真も飾って思い思いに設えている。毎日モップで綺麗にし物の配置も考えて事故防止に努め、職員も静かにゆっくりと気持ちに余裕をもって行動することで、利用者に安心して暮らしてもらえるようにしている。		
54		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー仕様・手すりの設置・居室入り口には名前や好きな動物の写真、目印にマリ等で飾り付けしている。トイレは分かりやすくトイレのマークや表示を貼り、目で見て確認できるように配慮している。			